難聴患者の臨床統計的観察

喜多野郁夫・北奥 恵之・藺田 史子
太田 和博* 松永 喬

A Clinicostatistical Study of Hearing Loss

Ikuko Kitano, Yoshiyuki Kitaoku, Fumiko Sonoda and Takashi Matsunaga
(Nara Medical University)

Kazuhiro Ohta
(Nara Prefectural Mimuro Hospital)

Clinicostatistical study was performed on 997 outpatients, who complained of hearing disturbance.

They consisted of sensorineural hearing loss (447 cases), mixed hearing loss (14 cases), and conductive hearing loss (409 cases).

Three hundred and seventy-two patients complained of tinnitus. Tinnitus with sensorineural hearing loss accounts for 187 cases, with conductive hearing loss accounts for 46 cases, and so-called non-hearing-loss tinnitus accounts for 134 cases.

256 complained of vertigo or dizziness.

Of the patients with sensorineural hearing loss, senile deafness accounted for 41.8%, and unknown origin accounted for 29.3%.

In patients with conductive hearing loss, otitis media with exudate (OME) accounted for 33.7%, and chronic otitis for 31.5%.

Key words: statistical study, hearing loss, out patients in our clinic

はじめに

耳鼻咽喉科の臨床において難聴は最もよくみられる症状であるが、難聴疾患全体を観察した報告はそれほど多くない^{1)~4)}。そこで今回我々は、昭和62年度の1年間に当科外来を訪れ、難聴を主訴とした新患者の統計的観察を行ったので報告する。

対象と方法

対象は、昭和62年度1月から12月までの1年間

に当科を受診した初診新患者5278名で、このうち難聴を主訴とした997例中、870例（難聴群）について感音難聴、混合難聴、伝音難聴に大別し、更に17種類の疾患別に性別年齢別に検討を行った。あわせて、耳鳴を主訴とした372例（耳鳴群）、めまいを主訴とした256例（めまい群）について難聴との関係を検討した（表1, 2, 3）。

結 果

1. 難聴群における難聴の分類、原因疾患

奈良県立医科大学耳鼻咽喉科学教室（主任：松永 喬教授）

* 県立三室病院耳鼻咽喉科

患者が難聴を訴えた997例のうち、感音難聴は447例44.9%、混合難聴は14例1.4%、伝音難聴は409例41.0%と難聴群は870例となり、残りの127例は耳垢栓塞、急性中耳炎、耳管狭窄症疑い例など、難聴を訴えたにもかかわらず純音聴力検査上は難聴が認められなかった症例である。難聴群870例は、生後3カ月から86歳までの平均年齢44.9歳で、男性452例、女性418例であった。難聴群のうち感音難聴は447例で、そのうち突発性難聴は11.9%、メニエール病は3.1%、音響外傷と騒音難聴は併せて5.1%、頭部外傷3.6%、老人性難聴41.8%、原因不明の

ものは29.3%となった。また、感音難聴のうち耳鳴も訴えたのは41.4%、めまいも伴ったのは18.8%であった。一方、伝音難聴409例のうち急性中耳炎は3.0%で、これは急性中耳炎全体の2.6%に相当した。耳管狭窄症は16.1%、滲出性中耳炎は33.7%、慢性中耳炎は31.5%となった。混合難聴は14例と少なく、慢性中耳炎が大半を占めた。

表 1 難聴疾患の原因分類

1	耳毒性薬物などによる中毒性難聴
2	音響外傷に起因する難聴
3	騒音難聴
4	外耳、中耳、内耳への直接、間接的外傷及び頭部、頸部への打撃によって生じる外傷性難聴
a	外傷性鼓膜穿孔
b	交通事故
c	その他
5 a	メニエール病
b	メニエール病疑い例
6 a	突発性難聴
b	めまいを伴う突発性難聴
7	原因不明の急性難聴
a	ウイルス性
b	その他
8	先天性、遺伝性難聴
9	聴器以外の器官の疾患または全身の疾患、病的状態などに起因する難聴
9	小脳橋角部腫瘍
10	急性中耳炎による難聴
11	耳管狭窄症による難聴
12	滲出性中耳炎による難聴
13	慢性中耳炎による難聴
14	真珠腫性中耳炎による難聴
15	老人性難聴
16	耳垢を含めた外耳道閉塞による難聴
17	機能性難聴
a	心因性
b	詐 聴

図 1 感音難聴と老人性難聴の年齢分布

図 2 伝音難聴と滲出性中耳炎と慢性中耳炎の年齢分布

図 3 難聴群と耳鳴群とめまい群の関係

感音難聴447例のうち男性は246例、女性は191例で、平均年齢は男性55.7歳、女性52.4歳、全体では54.3歳であり、50～70歳代にかけて大きなピークを形成していた。感音難聴患者のうち65歳以上の老年層は男性39.5%、女性35.1%、全体で37.4%であり、また老人性難聴は感音難聴の41.8%を占めることから、老人性難聴患者のピークが感音難聴患者のピークを形成してい

た (図 1).

伝音難聴409例のうち男性は191例、女性は218例で、平均年齢は男性35.3歳、女性35.7歳、全体では35.5歳であり、19歳以下と40～60歳代にピークを形成していた。滲出性中耳炎のピークは4～6歳の小児期に集中しており、9歳以下の伝音難聴の2/3以上は滲出性中耳炎となった。40～60歳代の伝音難聴の約半数は慢性中耳

表2 難聴疾患の原因分類

[illegible]

表 3 難聴性疾患の性別年齢別分類

年 齢		0～	1～3	4～6	7～9	10～15	16～19	20～29	30～39	40～49	50～59	60～64	65～69	70～79	80～
1 中毒性難聴	男性						2				1			1	
	女性計						2				1			1	
2 音響外傷	男性										1		1		
	女性計				1		1				1	1	1		
3 騒音難聴	男性						1	1	3	4	3	5			
	女性計						1	1	1	4	3	5			
4 外傷性難聴	男性														
	女性計														
a 外傷性鼓膜穿孔	男性		2	1	1	2	1	5	2	1				1	
	女性計		2	1	4	2	2	4	4	3			1	1	
b 交通事故	男性				5	4	3	9	6	4			1	1	
	女性計							2	2	3	1	1	1		
c その他	男性							2	2	4	1	1	1		
	女性計						1		2	3	1				
5a メニエール病	男性								2	1					
	女性計								2	1	1		1		
b メニエール病疑い例	男性								1	1	1		1		
	女性計								1	1	4	1	1		
6a 突発性難聴	男性						2	2	2	2	7	2			
	女性計			1				3	5	3	5	2	1	1	
b めまいを伴う突発性難聴	男性					1	1		1	2	1			1	
	女性計					1	1	1	2	1	4			1	
7 原因不明の難聴	男性														
	女性計														
a ウイルス性	男性														1
	女性計			1					1	1				1	
b その他	男性		1	5	3	3	2	1	10	8	14	4	10	5	1
	女性計	1	1	4	5	4	5	5	9	10	11	8	7	6	1
8 先天性、遺伝性難聴	男性	1		1	1		1								
	女性計	1	1	1	2	1	2		1						
9 全身疾患等による難聴 (小脳橋角部腫瘍を含む)	男性						1		1	1	1		1	1	
	女性計						1	1	2	1	1		1	1	
10 急性中耳炎による難聴	男性			6				1	1				1	2	
	女性計		1	6				1	1		1		1	2	

年 齢		0～	1～3	4～6	7～9	10～15	16～19	20～29	30～39	40～49	50～59	60～64	65～69	70～79	80～
11 耳管狭窄症 による難聴	男性			7	2	1	1	3	5	2	6	3	1	1	1
	女性		1	1	2			5	6	4	6	3	4	1	
	計		1	8	4	1	1	8	11	6	12	6	5	2	1
12 滲出性中耳炎 による難聴	男性	1	3	21	6	6	1	2	3	7	4	6	3	2	
	女性		1	21	9	3		2	7	7	10	4	5	3	1
	計	1	4	42	15	9	1	4	10	14	14	10	8	5	1
13 慢性中耳炎 による難聴	男性		5	1	1	4		4	7	12	9	5	10	9	1
	女性			1				5	7	17	16	7	13	3	1
	計		5	2	1	4		9	14	29	25	12	23	12	2
14 真珠腫性中耳炎 による難聴	男性					1			1	2					
	女性				1				3		2				
	計				1	1			1	5	2				
15 老人性難聴	男性									3	15	21	23	43	10
	女性									1	15	7	17	27	5
	計									4	30	28	40	70	15
16 外耳道閉塞による難聴	男性														
	女性														
	計														
17 機能的難聴 a 心因性	男性														
	女性														
	計														
b 詐聴	男性														
	女性														
	計														
感音難聴全体	男性		1	6	4	4	10	6	20	24	47	33	37	52	12
	女性	1		3	7	5	8	8	18	16	38	20	28	33	6
	計	1	1	9	11	9	18	14	38	40	85	53	65	84	18
混合難聴全体	男性							1	1	1	1	1		1	
	女性							2	1	1	2	2		3	
	計							1	3	2	3	3		4	
伝音難聴全体	男性	2	5	35	10	14	5	15	18	22	20	13	15	14	3
	女性		10	25	18	7	2	17	28	35	34	12	21	7	2
	計	2	15	60	28	21	7	32	46	57	54	25	36	21	5

炎であった（図2）．残りの伝音難聴症例は耳管狭窄症などであった．

混合難聴患者は14例と少なく平均年齢は54.4歳で，30歳以上にみられた．

2. 耳鳴群，めまい群における難聴の分類，原因疾患

難聴と耳鳴の関係，難聴とめまいの関係をみた（図3，表4，5，6，7）．難聴と耳鳴の関係

を難聴患者からみると，難聴患者の27.4%にあたる238例に耳鳴の合併がみられ，そのうち感音難聴患者は187例，伝音難聴は51例で，難聴患者に耳鳴が合併する場合は感音難聴が大半を占めた．これは感音難聴患者全体の41.8%に耳鳴を伴っていた事になる．

耳鳴を訴えた372例のうち64.0%に難聴がみられ，感音難聴は50.3%，混合難聴は1.3%，

伝音難聴は12.4%となり、無難聴性耳鳴は耳鳴患者の36.0%を占めた。

めまいを訴えた256例のうち、難聴を伴わないめまい患者は63.6%で、難聴を伴っためまい患者は36.7%となった。感音難聴を伴っためまい患者は、感音難聴患者全体の32.0%に相当し、

表 4 耳鳴を伴った難聴疾患症例

	原発性耳鳴 症例 %	続発性耳鳴 症例 %	全 体 症例 %
一側	79 17.7	1 0.22	80 17.9
感音難聴 両側	106 23.7	1 0.22	107 23.9
447例 計	185 41.4	2 0.45	187 41.8
一側	2 14.3		2 14.3
混合難聴 両側	3 21.4		3 21.4
14例 計	5 35.7		5 35.7
一側	36 8.80		36 8.80
伝音難聴 両側	10 2.44		10 2.44
409例 計	46 11.2		46 11.2
一側	117 13.4	1 0.01	118 13.6
全 体 両側	119 13.7	1 0.01	120 13.8
870例 計	236 27.1	2 0.23	238 27.4

表 5 難聴を伴った耳鳴疾患症例

	症 例	%
一側	84	22.6
難聴(－) 両側	50	13.4
計	134	36.0
難聴(+)		
一側	80	21.5
感音難聴 両側	107	28.8
447例 計	187	50.3
一側	2	0.54
混合難聴 両側	3	0.81
14例 計	5	1.34
一側	36	9.68
伝音難聴 両側	10	2.69
409例 計	46	12.4
一側	118	31.7
全 体 両側	120	32.3
870例 計	238	64.0

伝音難聴を伴っためまい患者は伝音難聴全体の6.5%に相当した。

難聴とめまいの関係を難聴患者からみると、難聴患者の11.6%にあたる101例にめまいの合併がみられ、そのうち感音難聴患者は84例、伝音難聴は17例で、難聴患者にめまいが合併する場合も感音難聴が大半を占めた。これは感音難聴患者全体の18.8%にめまいを伴っていた事に

表 6 めまいを伴った難聴疾患症例

	原発性耳鳴 症例 %	続発性耳鳴 症例 %	全 体 症例 %
一側	39 8.72	3 0.67	42 9.40
感音難聴 両側	38 8.50	4 0.89	42 9.40
447例 計	77 17.2	7 1.57	84 18.8
一側			0 0.00
混合難聴 両側			0 0.00
14例 計			0 0.00
一側	16 3.91		16 3.91
伝音難聴 両側	1 0.24		1 0.24
409例 計	17 4.16		17 4.16
一側	55 6.32	3 0.34	58 6.67
全 体 両側	39 4.48	4 0.46	43 4.94
870例 計	94 10.8	7 0.80	101 11.6

表 7 難聴を伴っためまい疾患症例

	症 例	%
難聴(－)	162	63.3
難聴(+)		
一側	42	16.4
感音難聴 両側	42	16.4
447例 計	84	32.8
一側	0	0.00
混合難聴 両側	0	0.00
14例 計	0	0.00
一側	16	6.25
伝音難聴 両側	1	0.39
409例 計	17	6.64
一側	55	21.5
全 体 両側	39	15.2
870例 計	94	36.7

なる。

考 按

感音難聴では、諸家の報告^{1)~4)}と比べて老人性難聴が41.8%と高率で、原因不明のものが減少していた。奈良県の老人層が国内平均より多い事も老人性難聴の多さに寄与していると考えられる¹⁶⁾。突発性難聴では、一側性51例、両側性2例と一側性がほとんどだったが、これは従来の報告に一致した^{5)~9)}。詳細については当科の北奥ら¹⁷⁾が報告している。発症年齢については、30~50歳代に多いことも諸家の報告と一致した^{5)~8)}。

メニエール病では、疑い例を含めると一側性13例、両側性1例と、長島ら¹⁰⁾の0.92%と比して1.60%と多かった。さらに昭和48年1月~49年12月に行われた渡辺ら¹⁴⁾による全国17施設でのアンケートによれば、メニエール病の外來新患患者総数に占める割合は、関東以北の施設からの集計では0.04~0.1%、関東以西では0.3~0.4%で、当科では疑い例を除いた5例でも0.57%となった¹⁴⁾¹⁵⁾。詳細については当科の和田ら¹⁸⁾が報告している。

伝音難聴では、小児の滲出性中耳炎と中高年における慢性中耳炎関連疾患の多さが目立った。

難聴の半数以上を占める感音難聴のなかで老人性難聴の占める割合が増加していることは、老人や老人と共に生活する人にとって、社会的生活を営む上で聴力は以前にもまして重要な意味を持ってきているものと考えられる。このような状況のなかで、耳鼻科医としては、単に加齢現象としかたづけることなく、補聴器のフィッティング、家族の啓蒙などに努力して行かなければならないと考えられる。今後、高度の感音難聴症例に対する人工内耳の積極的な導入や、鼓室形成術による聴力回復が思わしくない症例に対する人工中耳の適応なども考えていかなければならないと思われる。伝音難聴は滲出性中耳炎、慢性中耳炎が大半を占めており、滲出性中耳炎は特に4~6歳に多く見られた。当科の保存的治療で改善しなかった滲出性中耳炎症例

64耳に対するチュービング施行群では10 dB以上の改善を示した症例が68.9%、保存的治療施行群では改善率46.7%であり、今後の社会的生活を営む上でできるだけ早い時期に積極的にチュービングを行うべきであると思われた¹⁹⁾。

耳鳴においては感音難聴に随伴する耳鳴が50.3%と大半を占めたが、患者が難聴や耳鳴を訴えたにもかかわらず難聴を示さなかった無難聴性耳鳴は36.0%となり、国崎らの報告における29.5%と比べても更に多かった^{11)~13)}。無難聴性耳鳴の増加は、咽喉頭異常感症の増加と同様に近年の傾向と思われた。

めまいにおいては、めまいのみが63.3%、感音難聴を伴うめまいは32.8%だった。伝音難聴にめまいが伴うものは、慢性中耳炎などがあるのにたまたま椎骨脳底動脈循環不全などが起こったものと考えられる。

結 語

1. 昭和62年1年間に当科を受診した難聴を主訴とした997例中870例（難聴群）について難聴疾患の疾患別検討を行った。このうち感音難聴51.4%、混合難聴1.6%、伝音難聴47.0%であった。耳鳴を主訴とする耳鳴群では無難聴性耳鳴36.0%、感音難聴を伴う症例50.3%、混合難聴を伴う症例1.3%、伝音難聴を伴う症例12.4%であった。めまいを主訴とするめまい群では、めまいのみの症例63.6%、感音難聴を伴う症例32.0%、伝音難聴を伴う症例6.5%であった。

2. 難聴群では老人性難聴が感音難聴の41.8%を占め、9歳以下の滲出性中耳炎と30~50歳代の慢性中耳炎が伝音難聴の大半を占めた。

3. 耳鳴群では無難聴性耳鳴が36.0%と多く、めまい群では椎骨脳底動脈循環不全などによるめまい疾患が63.3%と多かった。

なお本論文の要旨は日本耳鼻咽喉科学会大阪地方連合会第227回例会（1988年12月3日）にて発表した。

参考文献

- 1) 切替一郎, 戸塚元吉: 感音性難聴に関する臨床的研究. 日耳鼻 **53**: 377~391, 1952.
- 2) 花田 力, 渡部泰夫, 市 吉和, 他: 感音性難聴の統計的観察. 日耳鼻 **65**: 43~48, 1962.
- 3) 山本悦生, 北 真行, 湯本英二, 他: 感音性難聴の統計的観察—過去12年の推移—. 耳鼻臨床 **69**: 738~742, 1976.
- 4) 西村忠郎, 久野俊雄, 岩田重信, 他: 当教室開設以来10年間の感音性難聴に関する統計的観察. 耳鼻臨床 **11**: 158~159, 1984.
- 5) 立木 孝, 本間利美, 山田朋之, 他: 所謂突発性難聴の臨床的観察. 日耳鼻 **72**: 1628~1634, 1969.
- 6) 滝口哲也, 大尾嘉宏巳, 梅田良三, 他: 当科における突発性難聴の最近10年間の統計的観察. 耳展 **29**: 53~58, 1986.
- 7) 中島 徹, 春山 隆, 高橋宏明, 他: 大阪医科大学耳鼻咽喉科における突発性難聴の臨床統計的観察. 臨床耳科 **13**: 188~189, 1986.
- 8) 久納俊雄, 西村忠郎, 岩田重信, : 当院開設以来10年間の感音性難聴に関する統計的観察. 耳鼻臨床 **76**増 2: 998~1002, 1983.
- 9) 宮崎為夫, 瀧口哲也, 梅田良三, 他: めまいを伴う突発性難聴の統計的観察. 耳鼻臨床 **80**: 715~721, 1987.
- 10) 長島泰行, 白戸 勝, 海野徳二, 他: 当科におけるメニエール病の臨床統計. 耳鼻臨床 補15: 47~53, 1987.
- 11) 赤池清美, 堀 悦明, 渡辺一夫: 耳鳴の一統計的観察. 耳喉 **28**: 661~664, 1956.
- 12) 国崎恵美子, 岩戸谷淳一, 鳥山 稔, 他: 当病院における耳鳴患者の実態. Audiology Japan **26**: 138~141, 1983.
- 13) 卜部信行: 耳鳴の臨床統計的検討. 耳鼻臨床 **78**増 4: 1731~1745, 1985.
- 14) 渡辺 勲, 水越鉄理, 大久保仁, 他: 全国17施設におけるメニエール病確実例の疫学調査成績. 耳鼻臨床 **69**: 1776~1782, 1976.
- 15) 松永 喬, 田上悦子, 内藤 雋, 他: メニエール病の受診実態. 耳喉 **48**: 65~71, 1976.
- 16) 松永 喬: 老人のめまい. 臨床と研究 **61**: 5; 208~215, 1984.
- 17) 北奥恵之, 喜多野郁夫, 松永 喬, 他: 突発性難聴の統計的観察—予後を左右する因子を中心に—. 耳鼻臨床 補37: 9~16, 1990.
- 18) 和田佳郎, 藤田信哉, 松永 喬, 他: 当科めまい外来10年間におけるメニエール病の統計的観察. 耳鼻臨床 補37: 59~65, 1990.
- 19) 山中敏彰, 柏木令子, 松永 喬, 他: 小児滲出性中耳炎におけるチュービング療法後の聴力変化について—各背景因子との関係もふくめて—. 耳鼻臨床 補37: 26~32, 1990.

(別刷請求先: 喜多野郁夫
〒634 奈良県橿原市四条町840
奈良県立医科大学耳鼻咽喉科学教室)